

同五月十二日～八月八日、湘桂作戦に参加。

同八月九日～十月三十一日、東部衡陽道掃討作戦に参加。

同十一月一日～二十年一月九日、茶陵来陽付近の警備

昭和二十年一月十日～二月二十八日、遂贛地区攻略作

戦に参加（南部粵漢作戦）。

同三月一日～五月三日、贛州付近警備。

同五月四日～七月五日、三南作戦に参加。

同七月六日～八月十七日、江西作戦に参加。

同八月十七日、十四日付停戦の大詔を拝す。

同九月十六日、常州地区に兵力集結。

昭和二十一年三月七日、上海集結。

同三月十八日、上海出航。

同三月二十三日、博多港上陸、復員完結。

師団は支那事変勃発以来、主として北支に続いて、満州に、更に一号作戦（京漢・湘桂・南部粵漢作戦）

発起のため北・中・南支と、中国大陸で戦闘に終始した極兵団である。

兵科で最も酷なのは工兵であると言われるが、聴取証言者の林氏の苦勞は察せられる。南部粵漢作戦は四国の第四十師団（鯨）と共にその任務を遂行したのである。

わが軍隊生活と湘桂作戦

新潟県 白倉 丘

——出征当時の家族の構成状況などをお聞かせください——

私は大正十年二月十七日、新潟県中蒲原郡大字二本木に生まれました。父は県庁の職員で、母は専業主婦でした。祖父と祖母はわずかでしたが、畑作に従事していました。その後、妹が生まれました。

父の給料を主とした生活ですので貧しかったと言った方が早かったです。しかし、周囲が農家でしかも農村の窮乏時代でしたので、家が貧乏だったという自覚はあまりなく、逆に周囲から恵まれていると見ら

れたかもしれません。

聞くところによると本家は明治二十年ころまで名主を務めていた旧家でしたが、時勢に乗れず没落し、今は墓地だけが残っています。

—学校の先生だったとか—

ええ、そうです。学歴は次のようです。

横越村木津尋常小学校卒業

新潟県立新潟中学校卒業

県立新潟師範学校卒業（昭和十六年三月）

四月に国民学校教諭として、長岡市在の三島郡岩塚村（現越路村）岩田国民学校に赴任。五年生男子組を担当。給料は六十円くらいでした。

—教員中に兵隊検査を受けたのですね—

そうです。分かり易く内地時代を①兵役、②兵役と家族に分けてお話しします。

①兵役

昭和十七年九月、六カ月間の教育召集を受け、中蒲原郡村松町の連隊に入隊しました。二十一歳の時でした。村松の連隊は軍縮により廃止、その後、新発田連

隊の一個大隊が駐屯していました。召集された時は新しい軍旗を持った連隊があり、東部第六十八部隊と称していました。

体力もなく文字どおりの弱兵が以後の訓練に耐え、戦地へ行ってからの生活と作戦に耐えることができたのは、ひとえに若かったからだと思います。

—次に待っているのが初年兵教育ですね—

大隊砲小隊に配属になりました。内務班に入った時の第一印象は「何だ明治の軍隊じゃないか」というものでありました。体力のない兵にとつて学科の時間は、誠に有り難かったです。

私的制裁は表向き禁止された故か予想していたよりは少なかつた。基本的には良き班長良き古参兵に恵まれていたということでしょう。

大隊砲であつたから、馬がいて、その扱いにはほとんど閉口しました。子供のころ馬車挽きの馬や、農耕馬を見ていたはずであるが、馬がこんなに大きいものであつたかと改めて驚きました。「お前たちは一錢五厘で来るが、馬はそうはいかないんだ。大切な兵器な

んだぞ」馬の取り扱いを指導された時の最初の言葉であり、説教の度に聞かされ、出てくる言葉でありました。

朝の既の掃除、暖かい馬糞のある寝藁を出すのは、慣れるまでは大変でした。不寝番に立ったときは下番するまで馬が逃げ出さないよう願っていました。

初年兵教育の締めくくりは大日ヶ原での演習であり、それから福島方面での秋季演習でした。班長と私は中隊の命令受領者となり、夜間演習のときの砲隊への連絡には随分と苦勞させられました。

演習の前後に班長から幹候の試験を受けるようにしきりに勧められました。君なら大丈夫甲幹に受かるからと大鼓判をおされたものです。谷川中隊長に呼ばれ、幹候補生の受験を勧められたとき、「自分は教育という大事な天職があります」と丁重にお断りしました。時局重大な時なので叱責を覚悟の上でしたが、幹候出身の中隊長だったせいも、「うん、そうか」と言われただけでした。それとも、我々が直ぐ戦地へ送られることをご存じだったのかもしれませんが。

――初年兵教育が終わってからどうでしたか――

三カ月の訓練が終わると臨時召集に切り換えられました。十一月の某日、襲まじりの雨の中を兵営を出発、五泉駅まで徒歩で行軍し、磐越西線經由で佐倉の東部第六十四部隊に向かいました。佐倉の営庭で整列したところ、「整列番号偶数一步前」で南支へ行くことが決まりました。全くあつけない限りで、兵隊とは員数であり、消耗品であることを今更のようにしみじみ感じました。

しかし、佐倉の約一カ月は軍隊生活の中で一番のんびりした時期で、日曜日の外出が楽しみでした。その間に軍旗祭もあり、その手伝いもしました。連隊旗手の豊田少尉が広東までの輸送指揮になったのは奇しき因縁でした。

――内地の軍隊生活中、家族との交流はいかがでしたか――

遠方でしたのでほとんど面会はありませんでしたが、文通はよくしました。父と妹もまめに手紙をくれ、田舎の様子がよくわかりました。教員の給料は復員する

まで貯金してくれました。使ってくれていた方がよかったです。兵隊の小遣いは額も少ないので送金しませんでした。兵隊の中には特に農村出身の兵隊は無駄使いせず五円、拾円と貯めて送金している人もかなりおりました。

十二月中旬から下旬にかけ佐倉を出発し門司から乗船しました。忘れもしない昭和十八年一月一日広東に上陸し、独立歩兵第六十六大隊の第二中隊に配属になりました。支那大陸にいた期間は大きく三つに分けられます。

広東・江門警備 十八年一月〜十九年五月

湘桂作戦 十九年六月〜二十年八月

抑留時代 二十年九月〜二十一年六月

何といっても華は湘桂作戦期間中ですが、その反面、苦しいことも、死傷者も中隊の半分近く出たと言っただけでしょう。

広東・江門時代は極端に言えば討伐以外の時は実弾の音や空襲がなく、内地の兵営生活の延長でした。抑留時代も空腹さえ我慢すれば復員の日の来るのを指折

り数えて待つ日々でした。

湘桂作戦に備えるため広東を発ち江門・新会地区警備へ十二月四日移動し、毎日訓練を続けました。

我が第二中隊は江鶴公路馬山に位置しました。中隊長は勇猛をもって鳴る金子中尉でした。

馬山に駐屯中一選抜の上等兵となりましたが、軍隊で星二つから星三つになるという感激は一生忘れられないものです。

昭和十九年二月、広東警備のため直兵団が編制され、第六十六大隊から一個中隊抽出の命令を受け、第二中隊からは一個小隊転出要員を出しました。要員の主体は九次の同年兵であり、それに、七次と八次の兵が若干加わりました。佐倉以来からの同年兵と別れるのは断腸の思いでした。ベッドで語り明かしたこと、演習のこと、ビンタを食らったことなど走馬灯のように思い出しました。

それから何人かの戦友の死に立ち会いましたが、その時はまた違った悲しみでした。

直兵団への転出と前後して、三十名くらいの補充兵

がきましたが平均年齢、三十三歳前後であまり役立ちそうにも思われませんでした。彼らの一期の検閲は五月に終わり、直ちに三十名が第二中隊に配属になりましたが、戦死、戦病死、病気で後送になった人もいて、最後まで中隊に残ったのはわずか三名のみでした。その後の補充がなく我々九次の兵が最後まで初年兵でした。余談ですが我々初年兵は戦闘・行軍の他に野営生活があります、そっくり村松時代の古兵、初年兵の関係である意味ではそれ以上です。

— 作戦とか行軍はどうでしたか —

戦闘も苛烈でしたが、行軍のつらさはそれ以上でした。道なき山、西江・柳江沿いで急流沿いの道、細い街並の石畳道、それに雨期には足の裏はたちまち水出に侵される。さんざんでした。なにしろ江門から漢口まで五千キロ前後徒歩行軍ですからね。それに重装備でしょう。作戦中ある古参兵の話した言葉が今でも耳に残っています。「作戦中、行軍中は本当に辛いなあ、しかし過ぎてしまうとその苦しさ、つらさは具体的に説明できないんだよなあ」

作戦中は下士官と共に命令受領者になりました。江門を出発し三水を抜き、梧州入城までは比較的順調でした。まだ西行の補給線は確保されていましたが、疲労も蓄積していない。何よりも犠牲者が思ったより少ないが、それからいけなかった。いつか西行に西行を重ね、中国と仏印ルートを結ぶ幹線ルートを確保するとか、桂林の飛行場の警備とか、いろいろと噂が流れました。兵隊の身では真相を知る由もなかった。帰国後十数年経ち、戦史・戦記・小説などから初めて湘桂作戦の目的と意義を知った次第です。

第二中隊は貴県でしばらく駐屯した後、北上し、穿山郷を警備しました。昭和二十年三月の頃でした。穿山郷警備中は補給が全くなく、軍靴も今は持っているものが最後と思うと仇やおろそかにはできない。大切にしなければと心から思う。だれの発想か、他中隊の真似をしたのかどうか分からないが、草鞋わらじを履いて歩哨に立つようになった。農家出身の人たちの作ることに早いこと。さすがだと感心しました。それにしても草鞋を履いて立哨する兵士の姿は悲惨というより漫画的

でした。敗戦直前の象徴的な姿と言えましょう。

警備中の第二中隊に大隊本部から司令部の高官が通過するので沿道警備せよとの命令が下りました。宇田川中隊長以下三十数名（重機関銃と馬一頭を含む）が出發しました。私も勇躍参加を命ぜられた一人でした。比留米曹長・鈴木軍曹と兵一人が斥候にでました。道路がL字型のところでは、斥候は狙撃兵に狙撃され、同時に待ち伏せの敵兵の一斉射撃を受けました。重機の馬は即死、馭者は腕を撃たれて負傷しました。私もアツと思う間もなく右肩擦過傷銃創を受けてその場にくずくまってしまうました。

日が暮れるまで地形は敵から見通しのため動くことできず、手当も受けることもできず、ひたすら援軍の来るのを待っていました。薄暮にまぎれて帰隊し、吉岡新三郎氏から丁寧（ていねい）に体を拭いてもらいました。吉岡さんはその後、間もなく戦死されましたが惜しい人でした。

一晩中、腹這いになり痛みをこらえていましたが、あんなつらい思いはありませんでした。以後、渋谷衛

生兵から毎日、消毒・治療してもらいました。その時の痛みは昨日のように思い出されます。傷はちょうど、豚カツ一枚くらいの肉片が無くなっていました。毎日鏡に写しては肉が盛り上がってくるのを辛抱強く待っていました。肉と共に指先くらいの破片が三つ四つと浮いてきました。それを記念に持って帰ってきましたが、いつの間にか紛失してしまいました。

傷口が完全に塞がれるまでには何カ月もかかりましたが、正確なところは忘れてしまいました。大きい破片は自然に排除されましたが、無数に細かい破片はそのまま包み込まれ今でも年と共に痛みに苦しめられています。

—三十名からの沿道警備隊がでたそうですが他の人はどうなったのでしょうか—

帰隊して治療中に断片的に聞いた話を総合してみましよう。

全員が道路左側にへばりついて身動きがとれない。悪条件を打開するため剣道達人の井上信一准尉が左手の高地に突進する。岩陰の銃眼の前で狙撃され重傷を

負う、後を追った伝令の桑原広土と増田正吾の両君とも撃たれて倒れる。桑原氏は柳州の病院に運ばれ、三月二十四日柳江県木山村付近で戦死。増田氏は復員後、昭和四十七年に物故されました。

その後こんな大惨事もありました。五月三十日、穿山郷駐屯の第二中隊は大隊本部に連絡のため宇田川中隊長以下十数名で出発しました。板塘付近で多数の敵の待ち伏せ襲撃を受け戦死者三名の他数名の負傷者を出しました。帰りが遅いので、加納少尉以下二十名が搜索に出ましたが出会えず空しく引き揚げてきました。大隊本部が逆方向から搜索全員を收容してくれました。中隊からも再び救援隊を派遣、翌朝戦死者三名を牛車に乗せ中隊本部に引き返しました。今思い出しても広西省は悪夢の地です。私にとって穿山付近の地形は今でもはつきり思い出されます。

—それから、柳州・桂林への進出ですか—

当初、大陸縦貫作戦が戦況の変化につれ仏印方面から撤収作戦援護に変わっていききました。支那派遣軍は「湘桂作戦の撤収」で「第六方面軍は適時湘桂沿線の

兵力を撤収し武漢地区及び北部粵漢線の要域を確保して前任務を続行す」と命令示達をしてきました。

よく言えば仏印、広東省からの転進、悪く言えば退却です。節部隊、特に独歩第六十六大隊が殿部隊となり敵に追尾されないよう、狭撃されないよう柳江を渡河し柳州、桂林に到着しました。

桂林北方の六層山嶺から大溶江一帯の山地に陣地を築き敵有力部隊が進出して我が軍の退路を断とうとするのと対峙したのです。ここにおける二十日前後の戦闘は前記穿山郷より激烈なものでした。山頂を占領し、敵襲により撤退し再占領の繰り返しで彼我とも多数の死者ができました。この攻防戦を語ると後一時間もかかると思いますが穿山郷の戦闘を中心に終わらせてもらいます。

—敗戦をいつ聞かれましたか—

湖南省に入り直ぐだと思えます。八月十八日のように思えます。宇田川中隊長から聞きました。

長い間、追いつめられた戦闘の連続だけに「戦いが終わった」と聞いた瞬間、ほっとしたというのが本当

の気持ちでしょう。いろいろ感慨が湧いてきたのはしばらく経ってからのことです。

昭和二十一年六月、生家に帰り、すべてが終わったと思いました。祖父が老衰で亡くなった他は変わったことはありません。

教職適格審査を経て、二十一年九月から復職しました。

【解説】

白倉氏の入隊は新潟県中蒲原郡村松町の東部第六十八部隊であるが、昭和軍縮の前には新発田連隊の一個大隊が駐屯していた。同氏が応召した昭和十七年九月には、連隊となっていたという。

十一月転属した千葉県佐倉の東部第六十四部隊は、歩兵第五十七連隊である。佐倉は二・二六事件前は歩兵第五十七連隊が駐屯していたが（連隊は明治三十八年、軍旗を拝受した伝統ある部隊）、満州孫呉に移駐し、昭和十九年レイテにおいて米軍と死闘をし、全滅に近い損害を被っていた。

初代歩兵第五十七連隊は、支那事変勃発後中支において盧山攻略で武勲を建て、後に内地復員軍旗を返納した壮年連隊である。白倉氏の入隊したのは、その後の歩兵第五十七連隊で、第六十一独立歩兵团（歩兵第一百一、百四十九、百五十七連隊）隷下であり、白倉氏が南支へ出発した翌十八年四月、第六十一師団となり、中支第十三軍隷下に入り駐屯した。

転属した独立歩兵第六十六大隊は、昭和十三年十月南支白耶土湾に上陸し、広東攻略戦に参加した独立機関銃第二十一大隊の後身である。昭和十四年一月三十一日、陸支機密第十五号により独立歩兵第六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一の六個大隊が編制され、第一独立歩兵隊の隷下に入った。

独立歩兵第六十六大隊は、南支広東省鶴山、新会、中山など各県城を攻略、後に汕頭、潮州の作戦にも参加した部隊である。昭和十六年十二月香港攻略戦の後、第三十八師団（沼兵团）の後を受け、中山デルタ地帯を中心とし討伐、警備に任じた後広東に移駐した。昭和十七年十二月十三日、軍令陸甲第一〇七号により

独立混成第二十二旅団編制が命ぜられた。これは第一独立歩兵隊（第二十三軍支隊）の独歩第六十六、七十、七十一大隊を基幹とし、更に独立歩兵三個大隊、山砲兵大隊、工兵・通信中隊各一をもつて編制されたのである。

その編制直後、白倉氏ら同年兵の一団が独立歩兵第六十六大隊に転属し、その大隊へ第九次補充兵として入隊したのである。九次とは部隊設立後の九回目の補充である。第九次の兵は年齢は現役兵とほとんど同じであるが、徴兵検査では第二乙・第三乙種の補充兵集団であった。

戦地での戦友

第一線で、いつ戦死するかわからない戦友の集まりで人情にも厚いものとの期待が裏切られたとのことであるが、駐留時、分哨や衛兵など少数の集団のしかも独立勤務のとき、古参兵などのしごきを受けることが多い。しかし、戦場で弾が飛んでくれば、強がりの弱い者いじめの古兵は案外弱いものである。弱い兵隊ほど下の兵隊に虚勢を張り権威を誇示しようとするもの

である。

弾丸雨飛、敵に銃剣をふるって突撃するとき、初年兵でも古参兵でも人間の本質が分かるようになる。意地悪い古兵でも戦場では弱さを露呈し、助け合う心を持つものである。戦友とは親・兄弟より心かようもので、終生交わりは続けられているものである。

当部隊の三十パーセント近くを失った湘桂作戦を生き残った戦友たちは、五十年経った今日も友情を持って生き続けている（特に同年兵は）。

戦友を失った者は、広西省を悪夢の地と思うが、今は桂林の石筍のような岩山や水清き漓江の川下りのため多くの人が訪れている。玉碎したマリアナ諸島の、サイパン、テニアン、グアム島は若い男女の楽園である。原子爆弾投下のB29の基地、火焰放射器で多数の戦友が焼き殺された洞窟、沢山の老若幼男女が自ら命を断った万歳岬、これらは戦友らを慰霊する場ではなく観光名所と化してしまっている。

戦争は悪夢であるだけで犠牲者の霊は浮かばれぬ、その死がよき日本、世界の礎とならんことを祈る。